

# Concert Reviews

◎

## 田崎悦子 P

日本を代表する女流ピアノリストの一人、田崎悦子の今回のリサイタルは、「田崎悦子ピアノ大全集」と銘打たれたシリーズの第一夜で「バロックから古典へ」、スカルラッティの「ソナタ」4曲、モーツァルトの「幻想曲ハ短調」と「ソナタ・ハ短調」



田崎悦子

K475&K457、バッハの「バロクティータ第4番」というプログラムであった。

響きの豊かな、多彩な音色に彩られた演奏で、彼女の指先から紡ぎだされるハーモニーには、それぞれにふさわしい色がある。スカルラッティは「ホ長調」K380、「ハ長調」K159、「二短調」K9、「ト長調」K14、テンポや音楽的表現などに古典派ソナタにも相通するコントラストを生み出して、なかなか魅力的であった。モーツァルトは、「幻想曲」のアダージョで繰り返される動機の冒頭音を強調したりして、ポリフォニックな立体感を生み出し、その絶妙なフレーズングに惹き付けられた。そして「ソナタ」は力強い。バッハも主旋律と対旋律とのバランスの取付け方がじつに見事で、また舞曲的にもよく弾んでいた。個々の作品を入念にアナリーゼして、それを再構築するその力は、当代一かもしれない。10月4日・東京文化会館(小)